

## 現代沖縄文学ノート

——二つの芥川賞作品について——

松島 淨

### 一 『首里の馬』（高山羽根子）

二〇二〇年と二〇二一年の芥川賞受賞作品に広い意味での沖縄が対象になっているのを見ると感慨深いものがある。それは一九九六年に又吉栄喜が一九九七年に目取真俊が芥川賞を連続受賞した時と同様の衝撃をもたらした。又吉も目取真も沖縄生まれで琉球大学卒である。しかしその衝撃の意味はかなり違う。今回の受賞者は二人とも女性であり、二〇二〇年受賞の高山羽根子は一九七五年富山県生まれで、多摩美術大学卒である。そして二〇二一年受賞の李琴峰は一九八九年台湾生まれで二〇一三年に台湾大学卒業後来日している。この二人の女性の経歴を見ても現代の文学の社会的背景がいかに多様化しているかをよく表している。もちろんこの二人の女性の経歴はその文学作品に反映していることは言うまでもない。

それでは二〇二〇年の芥川賞受賞作『首里の馬』とはどんな小説だったのであろうか。これがなかなかの曲者

で、難しいことは何も書いてないのだが、作者が一体何を言いたいのかと考えるとよくわからない。そのくらい読みにくい小説なのである。

まずはこの本の帯にある、「この島のできる限りすべての情報をまもりたい」と書かれている「沖繩及島嶼資料館」のことについて考えてみたい。やはり帯に「沖繩の古びた郷土資料館」とか「中学生のころから資料の整理を手伝っている未名子」という言葉も出てくる。しかしこの冒頭から十七ページに及ぶ「資料館」の記述においても、作者は沖繩の特定の文化の内容については一切語ろうとはしないのである。事実この資料館の現在の所有者である「順さん」という女性についても長い間、民俗学を研究してきた女性の学者で、これまで全国各地の民族風習や風俗を調べていたが、これからは沖繩の資料を収集することに集中したいと決めて、人生の最終的な場所として沖繩に住居をかまえたという。しかし我々読者はその順さんが何に興味を持って沖繩で研究をしようとしているかを知らされていないし、彼女の下で資料の整理を手伝っている未名子も何が面白くてここにやってきているかがよくわからない。そこで語られるのは常に「情報」であり「資料」であって具体的な沖繩人の生活や文化の中身ではないのである。

しかし私は気になるのである。作者はこの小説で一体何を書きたいのかということである。

「資料館には沖繩の人々から集めた情報の、今現在の感覚で考えれば真偽が確実でないあらゆるものが保存されていた。収集したのは順さんだけでも、記憶の聞き書きや人の主張は、収集する時代によっても要素が変わり続ける。時間によって変化していくうえ、その記憶の信頼度は絶えずゆらぎつづけるとも不安定なものだった。ただそれらの資料が真実の記録なのか、どこかで形を変えてしまったのか、それとも初めからすっかり偽物

なのか、頭を抱えて考えるのはその時代ごとの研究者がすること、収集する側はできるかぎり資料を集めるだけだと順さんも未名子も考えている。」(中略)「未名子は専門の研究者ではなかった。だから自分の勝手な判断でデータに自分の見解を書き加えるわけにはいかない。けれど、文化だけではなく、河も山も海岸線も、いろんなものは絶えず変化していく。未名子は自分の意見を書き加えることはせず、新しく変わっていく要素については、今までの記録とは別にして追加していった。どれだけ情報が増えても構わない。それを必要か不要か考え取捨選択するのもあらゆる研究者であって、それは絶対に順さんでも未名子でもない。」(『首里の馬』五十三頁)

再度言いたい。作者はここで何が書きたかったのか。お年寄りとはいえ順さんも民俗学者だったのではないのか。その研究者の順さんはどこへ行ったのか。アルバイトの未名子のことよりも私は順さんのことをもっと書いてほしかった。作者の記述に矛盾を感じるところである。作者は沖縄人の生活実態に迫ることを避けているように見える。

次は帯にある「世界の果ての遠く隔たった場所にいるひとたちにオンライン通話でクイズを出題するオペレーター」の「未名子の仕事のことである。その詳しい内容については次のように説明がなされている。

「遠くにいる知らない人達に向けて、それぞれに一对一のクイズを出題する。仕事の正式な名称は『孤独な業務従事者への定期的な通信による精神的ケアと知性の共有』略称は問読者(トイヨミ)というらしい。依頼人は個人というよりは、その所属する集団で、クイズの正解数や内容より、通信相手の精神や知性の安定を確認する目的でこのサービスを利用するのだという。」(『首里の馬』四十二頁)

カンベ主任は「ようは遊びですからね、なぞなぞ遊び」と言いながら、次のように解説している。「ひとりの解答者が選びとる解答は、その人自身の、人生の反映なんです。ただの自問自答ともちがいます。別の人生を過ごしている人間からの思いもよらない問いかけによって、解答者は軽く揺さぶられ、混乱し、同時に自分の経験の思いもよらないところから解答が引き出されます。その人生に一見もう必要がないと打ち捨てられていた、なんならもう二度と思いついたくもないと考えているような、脳の端にあつた経験が意味を持ちます。」(『首里の馬』四十四頁)

そして具体的にそのクイズの内容を次のように表現している。

「問題」

「鴨川、波、造形の影響は、何者へ？」

「……北斎？」

「正解！」

こんな調子であるが、私はこのクイズの説明はとても重要な部分だと思う。なぜならここで作者がほとんど初めてといていくくらいに「具体的な内容」を語っているからである。ここで作者は自分が多摩美術大学の卒業生であることを図らずも表明しているからである。私はここで作者の肉声を聞く思いがするのである。作者がこの小説で何を書かんとしているかも語っているからである。それで我々読者も安心するのである。そこで私は作者がこの作品で一六三回芥川賞を受賞した時の「受賞のことは」を思い出す。

「この困難な社会情勢の中で、じぶんごときがなにを、という思いは強くあります。できることは、今までも、

これからも変わらずとても小さなことです。自分の小説の中に書かれている人はいつも、おおきなことをしてかしているようでもあり、なんの役にも立たないことをしているようでもあります。

でも、この大変な、たいていの場合においてひどく厳しい世界は、それでも、生き続けるに値する程度には、ささやかな驚異に溢れていると思うのです。ときにはびっくりするくらい美しかったり、胸が締め付けられるくらい愛おしかったり、思い出していつまでも笑ってしまうくらいこっけいだったりします。この、どれだけ書いても書き足りないくらいいの、それらのことについてを、私はずっと書き続けていきたいです。」〔文芸春秋〕二〇二〇年九月号、三一七頁)

作者がその作品の最大の解説者であり批評家である、とこの受賞のことばを読んでつくづく思い知らされた気がする。私もこんな文学観の持ち主に沖縄の文学を書いてほしかったのである。期待が大きいだけに注文も多くなるということであろう。

クイズという小さな言葉の楽しみを持って世界の人々とつながることの意味を表現したのであるがその拠点がなぜ沖縄なのかと説明がないのはなぜなのかという疑問はある。わが国には昔から短歌や俳句などの短詩型文学の歴史があるだけにこの小説に詩的な想像力を感じるのである。

次はタイトルにもなった『首里の馬』についてである。主人公の未名子の活動範囲は沖縄県那覇市の港川とか旭橋などである。特に首里についての記述はないにもかかわらず、本のタイトルが『首里の馬』であるのがなぜなのか不思議である。そもそもこの本の中で「首里」という言葉が出てくるのは最後の沖縄戦の悲惨な状況の記

述の部分のところだけである。

「終戦間際の首里周辺、おきなわで展開された最大の爆撃戦はペロテ兄弟の本のタイトルにも冠されていた『タイフーン・オブ・スチール』という言葉、つまり鉄の暴風という表現によって人々に深い印象を与えた。首里はレイテ、硫黄島に並ぶ太平洋戦争中で最も激戦が繰り広げられたとされる地だった。」（『首里の馬』一五五頁）

首里はこの文章の中でも二箇所に出てくるだけである。だからここで登場する「宮古馬」（ナークー）が「首里の馬」と呼ばれる理由はないのである。私の想像ではこの小説が書かれる数年前に「首里城の炎上」という大事件があつて、作者の中にその衝撃があつて、それがこの小説の執筆の動機の一つだったのではないかとおもわれる。

ついでにこの沖繩戦の記述の中にのちの単行本の出版の際に修正された箇所がある。それは

「財産も家も森も、塀も坂道も、あらゆる生き物もすべて吹き飛んでしまった場所で、おおよそ人がこのあと生きていくようなことがまったくできなさそうな風景の中で、生きていくことができないという絶望さえ吹き飛んで、唯一の武器として持っている手榴弾を口にくわえないものがどこにいるんだろう。」（『新潮』二〇二〇年三月号、一三一頁）

という箇所の最後の部分である。それが単行本では

「財産も家も森も、塀も坂道も、あらゆる生き物もすべて吹き飛んでしまった場所で、おおよそ人がこのあと生きていくことがまったくできなさそうな風景の中で、生きていくことができないという絶望さえ吹き飛んで、唯一の自分を守るためとして持たされていた武器を自らに向けないほど強いものばかりじゃないのは当然だ。」

〔『首里の馬』 一五六頁〕

この修正は雑誌掲載時に沖縄の読者から指摘されたかどうかはわからないが一九七五年生まれの戦争体験のない作者のことを考えるとこのような間違いがあっても仕方がなかったと思う。

さてこの「首里の馬」のタイトルについて考えると、これを作者の好きなクイズ問題にすることができる。

〔問題〕

〔沖縄資料館、クイズ、馬〕

〔高山羽根子の芥川賞受賞作『首里の馬』〕

〔正解〕

ということになる。しかし正確には「那覇に現れた宮古馬」であろう。

また未名子が得意とする「みつつの言葉」を並列させるクイズ形式について作者が最後のところで解説をしている。

「未名子は、この世界の、あるひとつの場所をみつつの単語で紐づけて示すやり方があることを、しばらく前に知った。地球上の場所を数平米ずつに区切って、文字で構成された意味のある単語を、一見意味のない羅列として割り当てるやり方は暗号にも使うことが可能だった。割り振りをこちらで指定さえすれば無限に複雑化することができる。それを知る数人だけで共有した地図を作ることでもできる。他のひとから見ればただの文字や言葉だから、どういうふうにも隠すことができる。物語に混ぜることでも、あるいはなにかの問題に姿を変えることによってでも。未名子はクイズの問題と称して、世界のあらゆる場所の情報を指し示すことができる。」〔『首里

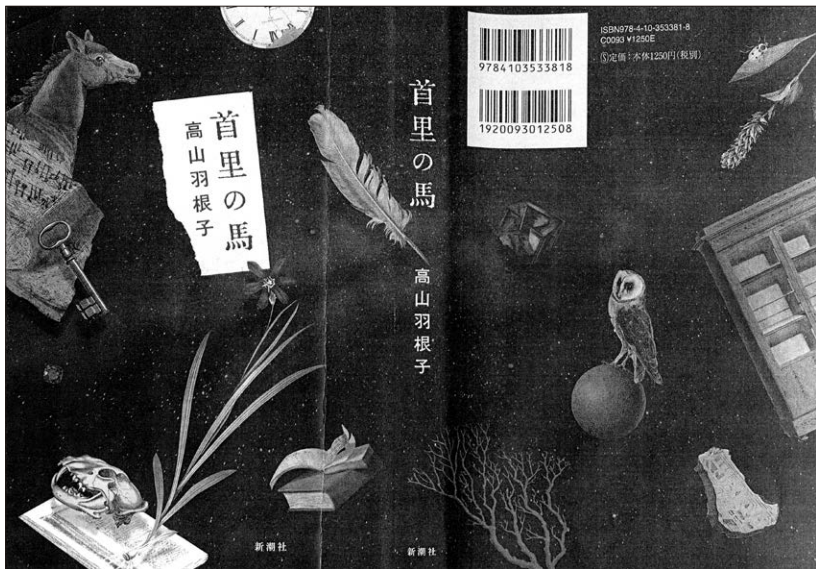
の馬』(一五二頁)

ここで作者は重要なことを語っている。それは「みつつの単語」がクイズの問題を超越して「物語に混ぜること」もできると言っているのである。それが先ほど私が作ったこの本の三つの単語の並列だったわけである。

そこで思い出したのは八十年前に書かれたある女性作家の短編小説である。その中にこんな一節があった。

「金魚、縞馬、花、稲妻——まるで幻想詩派(サンボリスト)たちの悦びそうなシーンだね。」

これは岡本かの子の「花は勁し」の一節である。そういうえば単行本の『首里の馬』のカバーの絵には暗い星空をバックにして馬や花や時計や本箱などが浮遊していた。作者が岡本かの子の短編小説『花は勁し』を読んでいたとは思えないが、フランスの象徴詩派の例えばボードレールやランボーやヴェルレーヌなど



高山羽根子『首里の馬』新潮社 カバー



の詩を読んでいたことは想像できる。つまりこの本で作者が採用した文体は自然主義のリアリズムの文体ではなく、象徴的な詩的な文体だったということである。

そこにこの小説の説明不足をもたらす要因があったと思われる。

## 二 『彼岸花が咲く島』（李琴峰）

二〇二一年の李琴峰さんといい二〇二〇年の高山羽根子さんといい、近年の芥川賞作家が女性でありしかも沖縄県外の出身者であることは沖縄文学に長年注目してきた私にとっても印象深いことであった。二〇二〇年受賞した高山羽根子さんが一九七五年生まれで、多摩美術大学で日本画を描いていたのに対し二〇二一年の受賞者である李琴峰さんは一九八九年生まれで、台湾大学を卒業し中国語、英語、日本語がわかる多言語人間である。

九十年代の又吉榮喜と目取真俊がいずれも沖縄県出身者で地域の郷土性に根差した文学を志向したのと対照的であった。前者の高山羽根子は美術と文学に造詣が深く、後者の李琴峰は多文化的視野の持ち主ということで、私はこの二人の今後の活躍に大いに期待している。そこで李琴峰の『彼岸花が咲く島』であるがまずその冒頭の部分を引用してみたい。大変興味深いことがあるからだ。

「砂浜に倒れている少女は、炙られているようでもあり、炎の触手に囲われて大事に守られているようでもあった。

少女は真つ白なワンピースを身に纏い、長い黒髪が砂浜で扇状に広がっている。ワンピースも髪もずぶ濡れで

黄色い砂がべったりと吸いつき、まぶしい陽射しを照り返して輝き、ところどころ青緑の海藻が絡みついている。ワンピース以外に衣類はなく、持ち物も特にないようである。少女の白い裸足に、ワンピースの裾がめくられて露わになっている太腿に、折れそうなほど細い首筋に、どこか寂しげな色を浮かべる顔に、あちこち傷跡がついている。鋭いものできられたような傷口もあれば、鈍器で殴られたような暗い紫色の痣もある。

少女を包み込んでいるのは赤一面に咲き乱れる彼岸花である。砂浜を埋め尽くすほど花盛りの彼岸花は、蜘蛛の足のような毒々しく長い蕊を伸ばし、北向きの強い潮風に吹かれながら揺れている。薄藍の空には雲がほとんどなく、太陽はちょうど中天に差し掛かる頃で、その下に際限なく広がる海水は浜辺から翡翠色、群青色、濃紺へとグラデーショナルしていく。白い波は彼岸花の群れに押し寄せては、岸を打つと音を立てて碎ける。この光景をみると、少女は波で海岸に打ち上げられたのだということを誰も疑問に思わないはずである。」(傍点、松島) (『彼岸花が咲く島』五頁)

この冒頭部分を読んで私が注目したのは「長い黒髪が砂浜で扇状に広がっている。」という部分である。それは『ガリバー旅行記』で主人公の船が嵐で遭難し見知らぬ島にたどりつき眠りから覚めたシーンである。

「わたしはもう極限まで疲れはてていたうえに、気候の暖かさ、船を下りる前に飲んだ半パイントのブランデーのせいもあって、とにかく眠くてたまらなかつた。ごく短く柔らかない草の生い茂る地面に横たわると、これまでの人生でも憶えがないくらい、ただただぐっすりと眠りこむ。たっぷり九時間以上は寝ていたにちがいない。目がさめてみると、あたりはすっかり明るくなっていた。起き上がろうとしてみたが、身体がまったく動かない。仰向けになって寝ていたのだが、ふと気がつくと、わたしの手足は両側からしつかりと地面にくくりつけられて

いるではないか。すっかりふさふさと長く伸びていた髪も、同じように地面にくくりつけてある。そればかりか、脇の下から太腿にかけて、身体にも細い紐がが何本か左右に渡されているのが感じられた。太陽はいよいよまばゆく照りつけはじめ、目が痛くてたまらない。周囲から何やらざわめくような音が聞こえてくるものの、仰向けのまま動けないわたしは、空を見上げているしかなかった。」(ジヨナサン・スウィフト『ガリバー旅行記』角川文庫、二一頁)

私が注目したのは「すっかりふさふさと長く伸びていた髪も、同じように地面にくくりつけてある。」という部分である。陸地に漂着した二人の主人公がともに、一人は長い黒髪を砂浜に扇状に広げて倒れている。そしてもう一人の主人公も長く伸びた髪を地面にくくりつけられている。私は李琴峰が『ガリバー旅行記』を読みながらこの小説を書いたとは思わないが、この二つのシーンはあまりにもよく似ているのである。

偶然の一致とはいえ一人は中国大陸の南の離島である台湾の出身者であり、もう一人はイギリス本国の離島であるアイルランドの出身者である。これは奇縁というべきではないだろうか。

それというのも二つの小説に奇妙に一致する箇所がさらにあるからふしぎである。

「わたしはなんでここにいるの？わたしはだれ？」「リー、海の方こうより来たダー」「少し会話すると、二人が使っている言葉は似ているが微妙に異なっているということに、ヨナも少女も気付いた。」「なに言っているかわからないよ」少女は混乱しているようで、両手で頭を抱えた。「見ろ」ヨナは右手を上げ、眼前に広がる果てしない海を指差した。「ニライカナイ・アー」「やめて、わからない」少女はますます混乱したようで、激しく頭を振り始めた。「いたい、いたいよ」「痛い？」「ヨナが訊いた。」「どこ痛い？」「からだのすべてがいたい」少女

は頭を振るのをやめたかと思うと、急に自分の両腕を抱え込む体勢になり、背中が小さく丸まった。「さむいよ」  
〔李琴峰『彼岸花が咲く島』文芸春秋八頁〕

他方の『ガリバー旅行記』にもこんな箇所がある。

それでも、まもなく一同はまた戻ってきて、中のひとりには勇敢にもわたしの顔全体が見える位置まで近づいてくると、いかにも敬服したというように両手を上げ、天を仰ぐと、甲高い、しかしはつきりした声で叫んだ。「ヘキナー・デーガル」ほかのものたちも同じ言葉は何回かくりかえしたが、当然ながら、その時のわたしには意味がわかるはずもない。読者の想像どおり、不安におののきながらその場に横たわっていただけだ。(中略)やがて、何やらひどく甲高い叫び声があがり、それがとぎれたかと思うと、今度は一人が大声で叫んだ。「トルゴ・フォナック」次の瞬間、何百本もの矢が私の左手に射かけられ、針のようにチクチクと刺さるのがわかった。」(ジヨナサン・スウィフト『ガリバー旅行記』角川文庫二二頁)

二人とも漂着した場所の住民の言葉がわからないという共通性があったわけである。ここにも両者の生まれ育った場所の辺境性が象徴的に表れている。しかもそれが小説の冒頭部分に書かれているのも興味深いところである。この言語的差異という異文化体験の衝撃からその物語が始まるところは奇遇としか言いようがない。

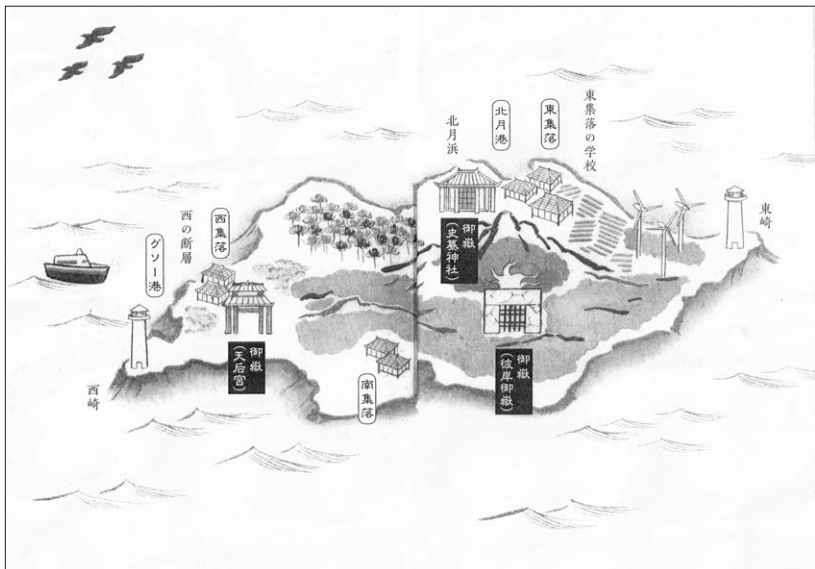
また小説に掲載されていたそれぞれの島の地図がよく似ているのである。  
以下地図のコピーを掲載する。

この小説は島に流れ着いた少女(ウミ)と彼女を助けて同居する島の娘(ヨナ)と男子のタツの三人の若者が島を統治するノロになるため、修行をする物語である。その過程で最高位の大ノロが島の歴史を語り伝え場面が

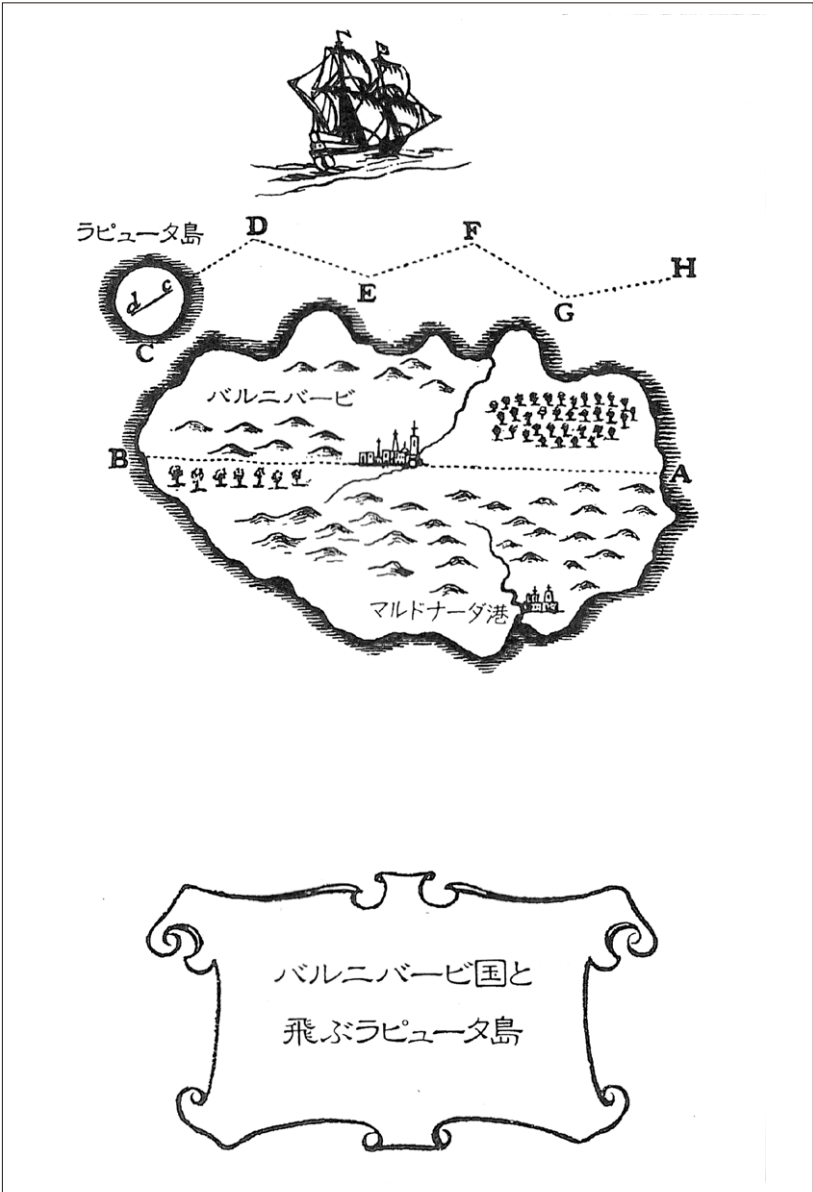
興味深い。それはこんな物語であった。

〔中略〕〈チュウゴク〉は〈タイワン〉を自分のものにしようとして攻め込んだんだ。〈タイワン〉は〈チュウゴク〉に負け、たくさんの人たちが逃げ出した。舟に乗って、この〈島〉へ逃げてきた人もいた。彼らもまた、私たちにとつては先祖だね。しかし先に〈ニホン〉から逃げてきた先祖は、〈タイワン〉から逃げてきた先祖を追い出そうとして、また戦が始まってしまった。もちろん男たち主導でね。

どれくらい人が死んだんだか、彼岸花のような、赤い血で〈島〉のあちこちが染まっていた。それで、やつと戦いに疲れた男たちはある日、今更のように自分自身の愚かしさに気付いたさ。これじゃ、自分たちを追い出した〈ニホン〉の偉い人たちや、侵略してきた〈チュウゴク〉のひとたちと、全く変わらないんじゃないか。彼らはこの赤く染まった島をぐるりと見回し、自分たちが作ってきた歴史のおぞましさにハッと



李琴峰『彼岸花が咲く島』文藝春秋 二頁



J.スウィフト『ガリヴァー旅行記(下)』福音館書店 四七頁

して、急に怖くなったね。それで、歴史を女たちに手渡し、自分たちは歴史から退場することにしたさ。長い長い人間の歴史でだれもやったことがなかったことに、私たちの先祖はようやく踏み切ったつちゅうわけだ。」(同右一五〇頁)

作者はこのユートピア的な寓話小説の舞台となる島をさらに次のように描いている。

「歴史を手渡された女たちは、まず戦をやめた。(ニホン)から逃げてきた人が(島)の東の集落に、(タイワン)から逃げてきた人が西と南の集落に住むように、采配を振るったんだ。もちろん行き来は自由なんでね、そのうち区別がなくなつて、習慣も言葉も信仰も文化も入り混じるようになった。その入り混じった言葉が、今(島)で使われている(ニホン語)さ。それとは別に、(ニホン)から逃げてきた当時に使っていた言葉を、女しか習うことができない、歴史を語り継ぐための(女語)として確立させた。つまり(女語)は古の言語いにしへのさ、普段使わないから、当初からずつとこのまま受け継がれてきて、ほとんど変わっていないんだ。」(同右一五二頁)

この沖縄の離島(与邦国島)を想定されたユートピアの島はすでに男性の政治的社会的な支配は克服されていて、その島は日本から逃げてきた人々と台湾から逃げてきた人々が沖縄の人々と共存している島として描かれている。しかもその島はすでに女性によって支配されていることになっている。ストーリーはその離島の理想郷を実現するために活躍する二人の女性と一人の男性の活動が中心である。とくべつに事件が起こるわけではないが、作者らしい歴史観と文化的な重層性の認識が特徴的な小説である。

今回紹介した二つの小説は、これまでの沖縄の歴史的现实(沖縄戦と米軍基地の支配など)こそ直接的には描かれてはいないが、わが国の中にあつて独特の位置にある沖縄の文化的位相を全く対照的な方法論によって小説

化しているものであった。沖縄の文学の新しい世代の登場とこれからの活躍に期待したいと思う。

二十世紀の初頭フランスでピカソとブラックが「キュビズム」という美術思想Ⅱ方法を展開し、対象を一度解体した後、再度ひとつのことはよってバラバラになった断片を縮合してみせたことがあった。また戦後、戦地から帰って小説を書きたいと言った大岡昇平に、評論家の小林秀雄はまちがってもリアリズム小説は書くな！と言ったとか。高山羽根子は、沖縄を対象にしてこれらの芸術思想Ⅱ方法を実践してみせた。それが「みつつの言葉による沖縄の象徴的な現代小説の試み」だった。

李琴峰は、中国語、日本語、英語を駆使して、海洋ユートピア小説を書いてみせた。その島は中国、台湾、沖縄、日本の中間に位置する架空の島だった。主人公は若い二人の女性と一人の男性のおとぎ話だった。